

平城京から出土した銅製獸脚

平城京跡（左京五条四坊一坪） 奈良市大森西町

JR奈良駅の南西の大森西町で行われているJR奈良駅南土地区画整理事業地の北寄りは、奈良時代の平城京の条坊復原では左京五条四坊の北辺部にあたります。平成13年度から発掘調査を継続して実施しており、これまでに弥生・古墳時代の遺構と、奈良時代から平安時代前半にかけての宅地に関連する遺構を確認しています。

一坪内では、平成21年度から平成26年度まで6度の発掘調査を実施しました。その結果、北側を画する四条大路南側溝、掘立柱建物34棟、掘立柱列30条、井戸5基、溝・土坑を検出し、重複関係から以下のように大きく4時期の変遷があることがわかりました。

A期 1坪利用か東西1/2に区画して利用されていた時期で、南側の建物の建替によって2時期に分けられます。建物の柱穴から8世紀後半から末にかけての土器・須恵器が出土しました。

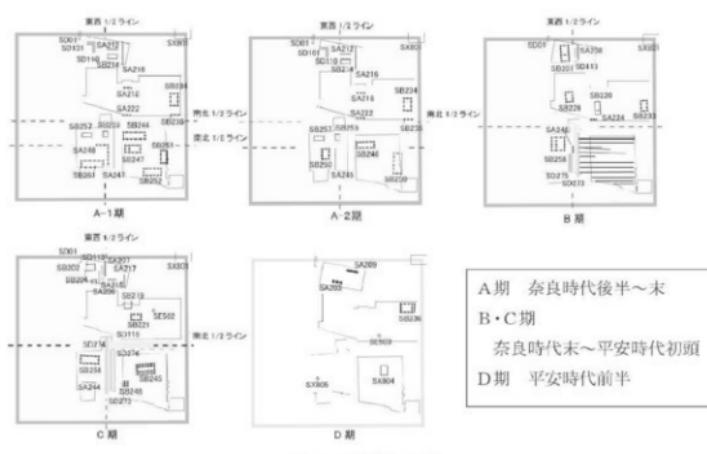
B期 東西1/2の坪内道路を造って坪内を区画する時期で、東西南北1/4に区画して利用されていたと考えられます。坪内道路の東側溝S-D273から奈良三彩小壺が出土しました。また、南東の区画内には畠地の畝間の溝とみられる一定間隔で



調査位置図



平成26年度の調査地全景（北から、中央に坪内道路）



坪内の宅地利用の変遷

並ぶ東西方向の溝があり、C期の柱穴より古いことから、この時期に菜園があった可能性が考えられます。この溝から銅製獸脚が出土しました。

C期 東西・南北1/2の坪内道路を造って坪内を区画する時期で、東西南北1/4に区画して利用されていたと考えられます。建物の柱穴から8世紀末から9世紀の黒色土器A類が出土しました。また、井戸S E502から9世紀前半の土器とともに軒平瓦6719型式A種が1点出土しました。この瓦は平城宮跡や伊勢国の大河内城と推定される三重県長者屋敷遺跡から出土しています。

D期 四条大路南側溝が廃絶された後の時期と考えられます。掘立柱建物S B236の柱穴から10世紀初頭頃の灰釉陶器皿が出土しました。また、井戸S E503の柱内から9世紀前半の土器とともに奈良三彩壺、墨書き土器が出土しました。

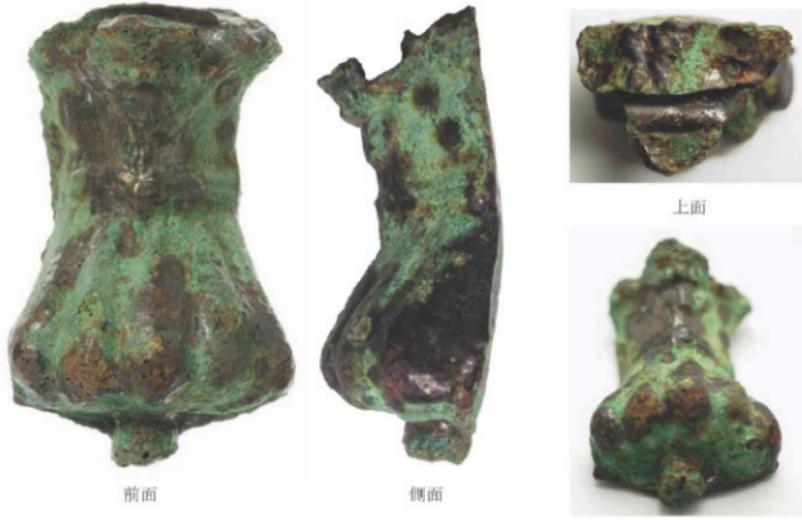
一坪内は、奈良時代後半から平安時代前半にかけて、都が長岡京・平安京と遷った後も宅地として利用されていたことがわかりました。

銅製獸脚 B期の溝から出土した銅製獸脚は、輸入唐白磁や陶硯の獸脚と似ていることから、奈良時代のものと考えられます。獸脚の大きさは残存高9.3cm、最大幅5.6cm、重さは約450gです。前面には足先の5本指と関節を立体的に表現しますが、後面は平滑になっています。上面の接続部には幅1cmの断面U字状の溝があります。

底面の突起部は、銅を流し込んだ痕とみられます。周縁にはバリ（はみ出た余分な部分）が残っているだけでなく、上面の付け根部分の一部が鋳出されていないため、未製品の可能性があります。

奈良時代の銅製獸脚には、正倉院の白石火舎の金銅製獸脚が知られています。また、遺跡の発掘調査で出土した足指の形状が残る銅製火舎の獸脚には、平城宮跡では東院の2点、兵庫県繁昌寺跡の1点、香川県讃岐国分寺跡の1点があります。

一坪では、この他に青銅製鉢1点・銅製丸瓶1点、鐵滓が多量に出土していることから、鋳造に関連する遺構があった可能性があります。



* 全面・側面はS=1/1

銅製獸脚